

「山椒魚」(井伏鱒二)の教材研究

加藤 郁夫

1 構成・構造を考える

○冒頭＝発端 山椒魚は悲しんだ。……

|

○山場のはじまり 悲嘆にくれているものをいつまでもその状態に置いとくのは……

|

◎ ―― 最高潮 「今でも別に、おまえのことを怒ってはいないんだ。」 (結末・終わり)

I 岩屋に閉じ込められる事件が起こる (事件のはじまり)

II 岩屋の外を眺める 谷川・めだか

III 小えびの来訪・岩屋からの脱出を試みる

IV 二度目の脱出の試み→失敗→絶望 (孤独)

V 蛙を閉じ込める

VI 一年経過

VII 更に一年経過→蛙との和解 (最高潮)

山椒魚は悲しんだ。

ここから、山椒魚が岩屋に閉じ込められる事件は始まる。

理由 ①岩屋から出られないことが、その後のすべての出来事 (外を眺めること・小エビや蛙とのこと) につながっている。

②描写的な書かれ方 (読者を驚かし、引き込む書き方)

「今でも別に、おまえのことを怒ってはいないんだ。」

蛙との和解 …… 最高潮

理由 ①蛙が山椒魚のことを許す。両者の対立から和解への変化。

②蛙が許すことで、山椒魚ははじめて理解しあえる相手を得る。

→ 孤独からの脱出。

③二者が分かり合えた時は、二者の別れを意味する。

この作品の事件の流れは、大きく二つに分かれる。

I～IV 岩屋に閉じ込められ、そこから出られないことを理解し、絶望するまで。

V～VII その結果、よくない性質を帯び、蛙を岩屋に閉じ込める。そして二年後に蛙と和解する。

そのように考えると、前半の最高潮を「ああ寒いほど独りぼっちだ!」、後半の最高潮を「今でも別に、おまえのことを怒ってはいないんだ。」と考えることもできる。岩屋に閉じ込められ、そこから脱出が不可能であると観念し、自らの孤独を嘆き悲しむまでが前半。蛙を岩屋に閉じ込め、蛙との対立から和解に至るのが後半。

表現面から見ると、前半は「 」のついているのが山椒魚の独白だけであり、語り手の説明が多くなっている。それだけ説明表現が多い。

後半は、蛙の登場により、山椒魚と蛙との対話が多く描かれており、描写的になっている。

授業のはじめにおいては、Ⅰ～Ⅶの内容をとらえさせ、どのような事件の流れになっているかをおさえる。

井伏晩年の改変は、蛙との和解の箇所をすべて削除している。

- 授業の終わりで、この改変を支持するか否かの意見を述べさせてはどうか
そのためには、Ⅴ～Ⅶの蛙とのいさかいから和解までの経過を丁寧に読み取っておく必要がある

2 形象を読む

〈Ⅰ〉

山椒魚は悲しんだ。

- ① 描写的な書き出し → 読者を一気に作品世界に引き込む効果
読者に「どうして?」「なぜ?」と思わせる効果
- ② 山椒魚を擬人化した書き出し
→ 以下に語られるのは、リアルな山椒魚の世界ではない。
- ③ 童話・メルヘン的な世界、戯画化された世界 → 寓話の世界かもしれない
*寓話（ぐうわ）とは、比喩によって人間の生活に馴染みの深いできごとを見せ、それによって論ずる事を意図した物語。
- ④ 山椒魚 ア・どちらかといえばグロテスクな生き物
イ・鈍重な動き
ウ・不細工
エ・山の溪流に住む（きれいな環境が必要）
- ④ 「悲しんだ」 → 何か悲しむようなことが起こった
→ 悲劇的な話か?（展開を予想する）
- ⑤ 七五調の書き出し → リズミカル
- ⑥ 太宰治『走れメロス』の書き出しに影響を与えたといわれる。
メロスは激怒した。

彼は、彼の棲家である岩屋から外へ出てみようとしたのであるが、頭が出口につかえて外に出ることができなかったのである

- ① 悲しんだことの原因
- ② 頭でっかち——「知識や理論が先走って行動が伴わないこと。また、そういう人やそのさま。」の意あり
- ③ 外に出れないこと自体は悲惨なことだが、「頭が出口につかえて～」は滑稽でもある。
- ④ ユーモラスな場面とも言える。

「なんたる失策であることか！」

*失策……考え方・方法を誤る。しくじり。 失敗……予期・計画のとおりにかず、目的が達せられないこと。

- ①大げさな言い方。普通にはいわない言い方。
- ②それだけに、それを言っている人物が滑稽に見える。
言っている本人は深刻でも、見ている側にはユーモラスに見える。
- ③「失策」むつかしい言い方 → 知的レベルの高さ

「いよいよ出られないというならば、おれにも相当な考えがあるんだ。」

しかし彼に何一つとしてうまい考えがある道理はなかったのである。

- ① 山椒魚は、完全に出られないと観念したわけではない。
- ② 出られるのではないかという希望を、まだ持っている。あるいは、希望を持ちたいと思っているがゆえに、出られないことを認めたくない。
- ③ 現実を冷静に見ることができない。現実を直視できない。
- ④ 出られないとあきらめるのには、あまりにも事態が重大すぎる。
- ⑤ 認識と現実との乖離。

翻訳体の表現

彼は、彼の棲家である～

～出入り口のところがそんなに狭かった。

～彼を狼狽させかつ悲しませるには十分であったのだ。

人々は思いぞ屈せし場合～

～泳ぎまわるべくあまりに広くなかった。

～うまい考えがある道理はなかったのである。

〈Ⅱ〉

山椒魚は、杉苔や銭苔を眺めることを好まなかった。

- ① 岩屋の中を眺めることを好まなかったということと同じ。
- ② 岩屋自体が山椒魚にとって好ましいものではなかったということ。
- ③ 必然的に、山椒魚は岩屋の外を眺めることになる。
- ④ 銭苔・杉苔……繁殖・種子散布 → 仲間を増やしていくもの
⇔ 山椒魚（一匹）仲間を持たないもの 対比の図式

山椒魚は岩屋の出入り口に顔をくっつけて、岩屋の外の光景を眺めることを好んだのである。

- ① 外の景色を眺めることは気分の転換にもなる。
- ② 外に出られないことをこの時点では、まださほど深刻には受け止めていない。
- ③ 岩屋の内を眺めることを好まないのだから、必然的に外を見るしかない。

そして小さな窓からのぞき見するときほど、常に多くの物を見ることはできないのである。

逆説的な言い回し (例)「急がば回れ」

- ① 見る範囲が限られているがゆえに、より注意深く見ようとする。よって多くのものを見ることが出来る。
- ② それしか見るものがないがゆえに、より集中してみようとする。

「なんという不自由千万なやつらであろう！」

- ① めだかたちを「不自由千万なやつら」と嘲笑する。 *嘲笑……ばかにして笑うこと。
- ② めだかたちの不自由さとは
一人（一匹）では行動できず、集団でしか行動できない。
個性や主体性がなく、他の動きに追随してしか行動できない
全体の動きに縛られる（全体もしくは世間の風潮に流される）
流行に流されていく
→ 集団としてのめだかと個としての山椒魚の対比
語り手の集団でしか行動できないものへの批判
- ③ 山椒魚は、わが身の不自由さには思いが至っていない。
→ 自己の姿をとらえられない山椒魚
*この点については、われわれの誰しにも言えること
- ④ めだかたちを笑うことで、山椒魚の不自由さがより際立って見えてくる。
→ そのおかしさ、滑稽さ
- ⑤ 群れとしてしか行動できないもののおろかさを笑う
→ 個である自己に対する自信や誇りを持っている
- ⑥ 語り手の集団でしか行動できないものへの

〈Ⅲ〉

「屈託したり物思いにふけったりするやつは、ばかだよ。」

- ①「屈託したり物思いにふけったり」していたのは、山椒魚自身ではなかったか？
- ②山椒魚は自身を客観的に見る事ができていない。
- ③小えびをばかにすることは、自身をばかにすることに等しい。
- ④この言葉は、考えることよりも行動を重んじることにつながる。
→ 出口に突進する行動へとつながる

彼は全身の力を込めて岩屋の出口に突進した。けれど彼の頭は出口の穴につかえて、そこに厳しくコロップの栓を詰める結果に終わってしまった。

- ①岩屋から出られないことを確認したにすぎない。
- ②行動を起こしても、何ら現状を変えるものとはならなかった。
- ③決心の末の行動であり、それだけに出られないことのショックは今まで以上に大きい。
- ④山椒魚にとって悲劇的なことだが、それを「コロップの栓」と表現することでユーモラスな表現ともいえる。

〈IV〉

山椒魚は再び試みた。それは再び徒労に終わった。

- ①岩屋から出られないことが、山椒魚自身に明確に自覚される。
- ②もはやその事実から目を背けていくことはできない。
- ③山椒魚にとっては重大な出来事だが、語り手はあっさりと表現している。
 - 語り手にとっては、前からわかっていること
 - 語り手と山椒魚との間に距離がある
 - 語り手は、冷静に山椒魚のことを見ている

諸君は発狂した山椒魚を見たことはないであろうが、この山椒魚にいくらかその傾向がなかったとは誰が言えよう。諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけない。

- ①「諸君」を繰り返している
 - 語り手が読者に向かって直接語りかけている。
- ②「嘲笑してはいけない」 → 裏を返せば、嘲笑されてもおかしくないと言語手は思っている。

既に彼が飽きるほど暗黒の浴槽につかりすぎて、もはや我慢がならないでいるのを、了解してやらなければならない。

比喩（隠喩）

- ①岩屋をこのように喩えている
- ②「暗黒」小さな出口しかないので、中は薄暗い ← 光のささない暗さ
- ③山椒魚の心の暗さでもある。 ← 岩屋から出られる可能性が完全になくなった＝絶望

山椒魚はこれらの活発な動作と光景とを感動の瞳で眺めていたが、やがて彼は自分を感動させるものからむしろ目を避けたほうがいいということに気がついた。

これらの活発な動作と光景＝水すましと蛙の動作や光景

- ① 岩屋の外の世界への憧れ
- ② 自由に泳いだり動き回れることへの憧れ
- ③ 山椒魚には、もはやどのように望んでもかなわないこと

彼は彼自身のことを、例えばブリキの切りくずであると思ったのである。

*ブリキ……スズをめっきした薄い鉄板。缶詰など、常に水分と接触する部材に用いられるほか、かつては玩具の主要な材料でもあった。イオン化傾向により、スズは鉄より腐食しにくいので、全面を覆うことで鉄の腐食を防ぐことができる。しかし、一部でも鉄が露出すると、その箇所から鉄の腐食が広がるのが欠点である。

- 比喩（隠喩）
- ①役に立たないもの
 - ②何の使い道もないもの
 - ③自己を否定的なものとする（自己否定）

「ああ寒いほど独りぼっちだ！」

- ①心の寒さ → 一人ぼっちの寂しさ
- ②岩屋から出られないこと、それも出られないのは自分一人であることを思い、孤独感・絶望感に打ちひしがれている。
- ③岩屋から出られないことで、よりいっそう孤独感が深くなった。
← これまでは、孤独を意識することもあまりなかったのではないか。
- ④仲間や友人を求める気持ちになる。
- ⑤個であることを誇っていた山椒魚が、個であることにたまらない寂しさを感じている。
- ⑥寒さは、岩屋から出ることができない絶望感へとつながっている。

〈V〉

悲嘆にくれているものをいつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである。

*よしわるし……「家が会社の近くなのもよしわるしだ。」「よしわるしだ」は“よくもあり、わるくもある”という意味

- ①なぜ、「よくない」と言わないのか？
- ②よい点はどこにあるのか？

山椒魚はよくない性質を帯びてきたらしかった。

- ①山椒魚の性格の変化
- ②岩屋から出られないことを観念したことで、性格が変わっていった。

そしてある日のこと、岩屋の窓から紛れ込んだ一匹の蛙を外に出ることができないようにした。

- ①「よくない性質」のもたらした結果
- ②蛙を自分と同じ不幸（岩屋から出られないこと）に陥れる。
- ③不幸（岩屋から出られないこと）が自分だけではないと思えることで、気が紛れる。
- ④これまでは、山椒魚は岩屋から出ることができないかわいそうな存在であったが、蛙を閉じ込めることで、山椒魚自身が加害者となる。
- ⑤おろかな被害者から悪党への変化

彼らは、かかる言葉を幾度となく繰り返した。翌日も、その翌日も、同じ言葉で自分を主張しとおしていたわけである。

- ①「彼ら」……山椒魚と蛙 → 両者を対等な関係として語っている
- ②「自分を主張」 → 両者が言っているのは、「出てこい」「こちらの勝手だ」「おまえはばかだ」といったことであり、特別内容のあることではない。
- ③山椒魚からすれば、蛙という相手がいることで、「寒いほど独りぼっち」という思いを紛らすことができる。
- ④蛙からすれば、出て行けば山椒魚に吞まれる（食べられる）のだから、出て行くことはできない。せいぜい言い返すしかない。
- ⑤両者を対等であるかのように描くことで、加害・被害の関係が曖昧にされている。

〈VI〉

初夏の水や温度は、岩屋の囚人たちをして鉱物から生物によみがえらせた。

擬人法

- ①気温が上昇して、山椒魚と蛙が冬眠から目覚めた。
- ②「岩屋の囚人」……山椒魚と蛙 → 両者を囚人と呼んでいる
- ③山椒魚は自らの過失で閉じ込められたが、蛙を閉じ込めているのは山椒魚
→ 二者を「囚人」と一括りにすることは、山椒魚が閉じ込めた責任を曖昧にする

そこで二個の生物は、今年の夏いっぱい次のように口論し続けたのである。

- ①「二個の生物」……山椒魚と蛙 → 両者を対等のように語る
- ②加害被害の関係を曖昧にしている

〈Ⅶ〉

二個の鉱物は、再び二個の生物に変化した。

- ①冬眠からの目覚め
- ②前の年と同じことが繰り返されている。
- ③「二個」と呼ばれることで、両者を対等に描いている。 → 加害被害の関係が曖昧

けれど彼らは、今年の夏はお互いに黙り込んで、そしてお互いに自分の嘆息が相手に聞こえないように注意していたのである。

- ①前年のようには、口論していない。状況の変化。
- ②口論に疲れたのか？
- ③口論の無意味さに気づいたのか？
- ④「お互いに自分の嘆息が相手に聞こえないように注意していた」
→ お互いに疲れてきている
相手に自分の弱みを気づかれないようにしている
対抗意識をまだ持っている
相手に気を許せないでいる
ここでも、両者を対等に描いている

ところが山椒魚よりも先に、岩のくぼみの相手は、不注意にも深い嘆息をもらしてしまった。

- ①蛙と言わないで「岩のくぼみの相手」という。
- ②「相手」ということで、両者は対等であるかのように描かれる。

彼は上の方を見上げ、かつ友情を瞳に込めて尋ねた。

- ①蛙を閉じ込めておこうという気持ちは、この時点では山椒魚にはない。
- ②同じ岩屋で二年間をともに過ごしたものとしての仲間意識がある。
- ③友情の気持ちを抱くことで、山椒魚は孤独ではなくなる。
- ④友情の気持ちを持つことは山椒魚にとって、初めてのこと。
- ⑤この時点で、自分が蛙を閉じ込めた加害者であることを山椒魚は忘れているのではないか。

相手は自分を鞭撻して答えた。

- ①VI以降、「蛙」という表現は用いられておらず、「相手」に変わっている。
- ②「蛙」と言わないことで、二者は対等の関係であるかのように表現される。
- ③視点は山椒魚の側にある。
- ④山椒魚は、「蛙」を自分と対等の存在としてみている。
- ⑤加害被害の関係が曖昧にされる。

「そんな返事をするな。もう、そこから降りてきてもよろしい。」

- ①山椒魚は、蛙に降りてくることを許す。
- ②もはや、蛙を閉じ込めておこうという気持ちは持っていない。
- ③蛙を閉じ込めたことを、謝罪しているのではない。
- ④加害責任を曖昧にしている。
- ⑤山椒魚は、自分を蛙よりも一段上においてみている。

「それでは、もうだめなようか？」

- ①「もうだめなのか？」というストレートな聞き方ではない。
- ②「よう」が入ることで、持って回った婉曲な言い方になる。
- ③山椒魚は、蛙に気を遣ってストレートな物言いができないでいる。
- ④山椒魚なりに、蛙を閉じ込めた責任を感じているのかもしれない。

「もうだめなようだ。」

- ①山椒魚の問いに合わせて「ようだ」と答えている。
- ②山椒魚の問いかけに気遣いを感じたので、あえて婉曲な言い方で答えている。
- ③自らの死を明確に示していない。
- ④山椒魚に対して、閉じ込めた責任を問う言い方ではない。

よぼどしばらくしてから、山椒魚は尋ねた。

- ①すぐに答えていない。
- ②かなり長い間がここにはある。
- ③山椒魚が、蛙の答え「もうだめなようだ。」の意味を受け止め考えている時間。
- ④自分の行為（蛙を閉じ込めたこと）が、蛙を死に追い込んだことを考えている。
- ⑤自分の責任を、自らに問いかけている間。
- ⑥何と蛙に言えばよいのかを考えている間。

「おまえは今、どういうことを考えているようなのだろうか？」

- ①日本語として不自然なほど、持って回った言い方。
- ②普通に言えば「おまえは今、どういうことを考えているのか？」
- ③蛙に対して申し訳ないという思いが、このような持って回った言い方をさせている。

- ④蛙の死に近いことを聞いても、直接に謝罪の言葉を口にしているわけではない。
- ⑤素直に蛙に謝ることができない。
- ⑥もはや言葉の上で謝罪してもどうしようもないと思っている。
- ⑦蛙に何と言ってよいかわからず、回り持った言い方でカエルの気持ちを尋ねた。

相手はきわめて遠慮がちに答えた。

- ①ここでも「蛙」ではなく、「相手」。
- ②山椒魚が蛙に対して気遣っていることがわかり、遠慮した言い方になった。
- ③山椒魚が蛙を閉じ込めたことを後悔していることがわかり、山椒魚を責めるような言い方をしたくないので、遠慮がちになった。

「今でも別に、おまえのことを怒ってはいないんだ。」

- ①「今でも」 → 山椒魚を恨んだり、怒ったりする感情は初めから持ってなかった。
- ②山椒魚を気遣って、「今でも」とあえて言っている。
- ③山椒魚の行為を蛙は許している。
- ④この二年間の岩屋での暮らしの中で、山椒魚に対して親しみや好意をもつようになってきた。
- ⑤岩屋から出られない山椒魚のことをかわいそうに思っている。
- ⑥蛙のこの言葉で、山椒魚は蛙を閉じ込めた行為が許される。
 - 山椒魚は蛙の言葉によって、罪が許され、気持ちが楽になる。
- ⑦口論し、対立していた山椒魚と蛙の和解が成立する。
- ⑧山椒魚は、蛙という友人を持つことになる。
 - もはや山椒魚は一人ではない。
- ⑨友人を得たが、またそう遠くない先に山椒魚は一人になる。
- ⑩二度と山椒魚は誰かを岩屋に閉じ込めるような行為をすることはないであろう。
- ⑪一人になっても、蛙という友人を持った事実は残る。

3 作品を吟味・評価する

1985（昭和 60）年の自選全集で最後の蛙との和解の場面（以下に示す）を大幅に削除した。

ところが山椒魚よりも先に、岩のくぼみの相手は、不注意にも深い嘆息をもらしてしまった。それは「ああああ」という最も小さな風の音であった。去年と同じく、しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の嘆息をそそのかしたのである。

山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかった。彼は上の方を見上げ、かつ友情を瞳に込めて尋ねた。

「おまえは、さっき大きな息をしたろう？」

相手は自分を鞭撻して答えた。

「それがどうした？」

「そんな返事をするな。もう、そこから降りてきてもよろしい。」

「空腹で動けない。」

「それでは、もうだめなようか？」

相手は答えた。

「もうだめなようだ。」

よぼどしばらくしてから、山椒魚は尋ねた。

「おまえは今、どういうことを考えているようなのだろうか？」

相手はきわめて遠慮がちに答えた。

「今でも別に、おまえのことを怒ってはいないんだ。」

結果、作品は、以下のところで終わることになった。

更に一年の月日が過ぎた。二個の鉱物は、再び二個の生物に変化した。けれど彼らは、今年の夏はお互いに黙り込んで、そしてお互いに自分の嘆息が相手に聞こえないように注意していたのである。

蛙との和解は示されず、山椒魚と蛙がこの先どうなるのかも、示されないままに終わる。

教科書掲載版（A）と削除版（B）を比較し、どちらがよいかそれぞれの意見を述べる。。

教科書掲載版（A）

「今でも別に、おまえのことを怒ってはいないんだ。」という蛙の言葉でおわることで、山椒魚は蛙に許され、山椒魚と蛙とが和解することが示される。読者にとっては悲劇的な終わりではなく、少しほっと出来る結末となる。山椒魚が孤独と絶望の果てに死んでいくのではなく、蛙という友人を得ることで、山椒魚の未来に少し暖かいものを見ることができる。悲劇的な終わりではなく、ややハッピーな終わり方といえる。

作品の前半は、山椒魚が岩屋から出られないことで「ああ寒いほど独りぼっちだ！」と孤独と絶望に陥っていく姿を描いている。描き方には随所にユーモラスなところが見られるが、全体としては暗い印象が強い。後半の蛙を閉じ込めるところも、事件としては暗いものである。それだけにその暗さを引きずって終わるのではなく、蛙が山椒魚を許し、両者が和解して終わることで、読者はほっと安心できる印象を持つことができる。

削除版（B）

山椒魚が蛙を閉じ込めたのであり、その理由も「山椒魚は、相手の動物を自分と同じ状態に置くことのできるのが痛快であった」というものである。蛙が山椒魚に対して何か悪さをしたというものではない。山椒魚は蛙を閉じ込めた加害者であり、蛙は被害者である。蛙を閉じ込めたことについて、山椒魚に弁護の余地はない。にも関わらず、VI以降では、「蛙」ではなく「相手」という表現になり、加害被害の関係が曖昧にされている。

さらにラストの「今でも別に、おまえのことを怒ってはいないんだ。」という蛙の言葉は、あまりにも山椒魚にとって都合のよいものとなっている。この言葉で山椒魚は救われるかもしれないが、閉じ込められ、そのまま岩屋の中で死を迎える蛙の立場からみれば、非常にリアリティに欠けていると言える。安易な「和解」を描くことは、逆に作品の説得力をなくしてしまう。両者が、黙り込んだまま終わる削除版の方が、その後の展開を読者に想像させる終わりになっており、面白いといえる。